
音痴対決

ぴいち

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

音痴対決

【Nコード】

N0545A

【作者名】

ぴいち

【あらすじ】

園子の家のカラオケBOX誕生記念で行うゲームに音痴である筈のコナンが呼ばれた！？そして着いた先はある森の中の山小屋だった

ここは江戸川コナン（こと工藤新一）の居候している毛利探偵事務所。

そして先ほどから聞こえる騒音の発信源ともなっている人が遊びに来ている。

「ゲームしよう。ゲーム!!」

「じゃあ。かくれんぼでも・・・」

「ええ？俺たち少年探偵団だぜ？そんなのより仮面ヤイバーごっこしようぜ」

「コナン君は何がしたい？」

騒音となっているのがこの人たち・・・少年探偵団+哀である。しゃべってない・・・

We can start in my life 一緒にあきらめず夢と

ねえもう1人の自分に会えるから

「蘭姉ちゃん。メルみたいだよ。」

「えっ。ほんとだ園子からだ!」

そのメールの内容はこんな内容だった。

蘭へ

元気w？いきなりで悪いんだけど、明日うちのカラオケBOX誕生記念にゲームをやることになったんだけど・・・そのゲームが歌が上手い人じゃなくて音痴な人を決めるゲームなのよ・・・。それで蘭の家にコナン君いるでしょ？あの子新一君に負けなくらい音痴だからどう？

いい返事待ってるねw

園子

「面白そうね、コナン君。行こう。」

「うん・・・。（園子のヤロオ）」

返事をしてからコナンは不思議に思った。いつもならとびついてくるはずの探偵団たちがみむきもしない。その代わりに意外なじんぶつが声をだした。

「私も行こうかしら・・・。」

そう、哀である。コナンはびっくりしてただあぜんとしていた。

そんなこんなで音痴対決は蘭・園子・コナン・哀が出席することになった。もちろん参加するのはコナンだけなのだが・・・。

↓次の日 AM10:30 探偵事務所の前↓

「園子遅いね。」

約束の時間はAM10:00

30分も遅れているのでさすがに蘭は心配になってきた。

「タクシーで園子の家まで行ってみよう。何かあったのかもしれないし・・・」

蘭がタクシーを呼ばうと携帯電話のボタンを押したときだった。

「ゴメン蘭。道が混んでたから。さあ早く乗って。遅れるわよ?」

園子が来た。でもなんか様子がおかしい。別にどこがとはいわないが。それに気づいたのは園子の親友蘭ただ1人だった。

とにかく、遅れそうだったので車に乗った。

「そういえば園子。カラオケBOXってどこにできたの?」

「ひみつよ。ひみつ。着いたらわかるわ。」

それから車は延々と2時間ほど走りつづけ、ある森の中の山小屋の前で止まった。そこはカラオケBOXというイメージではなく、何年も使われていない古びた感じの山小屋だった。

「園子。ここでやるの?なんか怖いんだけど・・・。園子?」

園子はいなくなっていた。変わりにそこにいたのは見たことのない女だった。その女はポケットからなにかを取り出しそれを蘭にむかって投げつけた。それは蘭の頭をかすって地面におちた。それが地面に落ちるとそこにいた蘭・コナン・哀は気を失った。何かを投げつけた女は哀以外は知っている人だった。だが、見たのは哀だけだ

った。

〔数十分後〕

コナン・哀はすでに寝覚めていた。きみのような事になぜか園子もいる。

〔眠らされてから7分経過〕

「ん・・・ここは・・・？あつ！そっいえば園子さんに化けてた人に眠らされたんだっただわ。ほかの2人はまだ起きないみたいね・・・」

「ん・・・灰原？ここは・・・っつ！」

コナンも目覚めた

「大丈夫よ。まだ誰も帰ってきてないわ。」

山小屋の中を見て回っていた哀が答えた。

「その代り、私たち以外にも誰かいるみたいよ。」

「なんだって？」

コナンは哀が出て来た部屋の方へ走っていった。

そこには・・・・・・・・・・・・・・・・園子がベットに寝ていた。

「なんだ・・・・園子が・・・・」

そのときだった・・・・・・・・。

ガチャ・・・・

玄関のドアが開く音がした。

玄関のドアを開けてはいってきたのは、なんと園子だった。

「はろーん。起きたー？」

コナンは啞然としていた。

「園子さん？じゃあベットで寝ているのは？」

哀がコナンの思っていたとおりの事を口にした。

「ああ。あれはね、パパに頼んで知り合いの人に作ってもらったのよ。」

それから20分ぐらいかけて今までの事を聞いた。途中で話が関係ない事に行ったり、コナンが詳しく追求したりして20分ほどかつ

たのだ。

要点だけまとめるところだった。

最初に待ち合わせの場所に来たのはなんと園子の姉だった。そして園子の姉が投げた物は睡眠ガスだった。こんな手の込んだことをしたわけは園子の思いつきだった。

まあそんなこんなでやっと帰ることになったコナン達は帰りにカラオケに行ったのだが、コナンの歌声を聞いて哀が呆れたのは言うまでもない。

（後書き）

こんにちは 初 投稿のぴいちです。

なんか意味不明な小説・・・（テカもはや小説じゃない・・・？

まあ・・・中1の低レベルの人が書いたってことで納得してください（苦笑）

こんな作品ですが感想（もちろん注意などでも）いただけるとうれしいです

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0545a/>

音痴対決

2011年1月6日14時20分発行